



南天門自然植物園の設立

植物園の建設は、立花前代表からの宿題でした。98年、太行山中で気候と土壌の条件が比較的良好な霊丘県で調べてみると、落葉広葉樹の自然林があちこちで見つかったのです。山奥の村からさらに歩いて2～3時間もかかる、放牧もは入れない山のなかに、モンゴリナラ、シナノキ、カエデ、トネリコ、ハシバミなどの自然林がある。このことは、GENの緑化協力に大きな影響をあたえました。かねてからの課題だった樹種の多様化に、大きな可能性がひらけたのです。

自然林からそう遠くなく、国道に近くて交通便利な南庄村に、植物園をつくることにしました。86haの土地の100年間の使用権を買い、刺のある植物で囲いをつくって放牧を排除したら、次の年から灌木や草がどんどんしげってきました。あらためて、放牧の圧力を痛感させられたのです。

当初は霊丘自然植物園と呼んでいましたが、地元の人にはなじまなかつたらしく、現地スタッフからの希望で南天門自然植物園と改名しました。南天門というのは、植物園がある山の頂上付近を呼ぶ名前です。

900～1,300mと高低差があり、地形の変化が大きいのも魅力です。いろいろな条件で、いろいろな植物を試すことができるからです。高いところにまばらに生えていたモンゴリナラは、年に直径で2cm太り、これまではヒツジやヤギに食べられていた芽生えもたくさん育っています。シラカンバの苗が育っているのもみわかりました。木々は年々成長し、2010年ごろには日本の森林と変わらないほどになりました。目下の心配は山火事で、空気が乾燥して風が強い上にお墓参りで火を使う春には大変な警戒ぶりです。

低いところには苗畑や温室をつくり、落葉広葉樹の苗などを育てて、園内や緑の地球環境センター、カササギの森に植えています。スタッフは山を歩いて大量の種を採取し、みんなで少しずつ分けて、さまざまな方法で育てています。智恵と工夫でがんばっています。